

平成 17 年度 修士課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

脳外傷者に対する「簡易自己認識評価スケール」の開発

学位の種類： 修士（理学療法学）

保健科学研究科理学療法学専攻 学籍番号 045201

氏名：一場 道緒

（指導教員名：渡邊 修）

脳外傷者における病識の低下は、就労・就学などの社会復帰に際し、大きな障害要因になるといわれている。しかし、本邦において病識に関する実用化された評価法は渉猟する限り知られていない。そこで我々は、病識低下に関し、欧米で使われてきた評価表である Patient Competency Rating Scale(PCRS)⁷⁾⁸⁾、Behavioral assessment of the dysexecutive syndrome(BADS)⁹⁾、Self-regulation skills interview(SRSI)¹⁰⁾、Self-awareness of deficits interview(SADI)¹¹⁾を参考にし、他の先行研究や臨床における知見を踏まえ、本邦の土壤にあった用語を用いて、より簡易で短時間に評価できる、新たな『簡易自己認識評価スケール(仮称)』を作成し検討した。

簡易自己認識評価スケールは、日常生活活動・対人関係・認知・情動の4つの下位項目で成り立ち、全部で18の質問で構成されており、2種類の評価用紙を用いて本人と本人のことをよく知る評価者が別々に評価を行うものとした。評価方法は5段階評価を採用し、それぞれの問いについて1(できない)から5(簡単にできる)の5段階で評価し、項目ごとに本人と評価者のスコアの差を算定した。従って、本人のスコアが評価者のスコアを上回る場合、本人は自己能力に関し過大評価する傾向を示し、逆に本人のスコアが評価者のスコアを下回る場合、本人は自己を過小評価する傾向を示すと推測できる。

健常者群 17 名、および重度脳外傷者群 16 名について簡易自己認識評価スケールを適用した結果、脳外傷者群においては全ての下位項目で本人と評価者の認識に有意差があり、脳外傷者群は、健常者と比較し有意に自己を過大評価する傾向が認められた。また簡易自己認識評価スケールは、PCRS との有意な相関が得られた。結果より簡易自己認識評価スケールの妥当性が示唆された。

このスケールは、急性期を過ぎ就労や社会復帰に向けた症例を主な対象とし、社会復帰に関連すると考えられる項目をまず大まかにスクリーニングすることが主な目的となる。日常生活活動・対人関係・認知・情動の4つの下位項目別に定性的に、しかも定量的に評価でき、時間も15分程度と短時間で評価を終えることができるという利点をもつ反面、評価者、評価項目、信頼性に関する課題を残しているため、今後、症例を増やし、本スケールの検証を行いたい。